家畜の野生化：チベット高原における種間関係のダイナミックス

シンジルト

一　種間関係の連鎖

河南蒙旗（中国青海省黄南チベット族自治州河南モンゴル族自治県）はチベット高原東部に位置する自然豊かな牧畜地域である。住民の食生活は肉が中心であり、なかでも羊の肉が最もよく食されている。彼らの先祖が一七世紀に天山山脈からチベット高原に移住し、今日の河南蒙旗一帯を拠点に選んだ理由の一つは、まさにこの地の羊肉の美味しさだった［シンジルト　二〇一六］。羊肉や羊は、彼らの歴史や社会を理解するうえで無視できない存在である。しかし、二〇〇〇年代に入ってから河南蒙旗で羊肉が食卓から徐々に減りはじめ、今や肉といえば牛肉（ヤクの肉）になった。現在、河南蒙旗のレストランなどで調理に使われる羊肉のほとんどが、周囲の農耕地域から輸入された、施設で飼育された羊の肉だという。それまでは河南蒙旗の人びとは、草原で放し飼いにされた羊の肉しか食さず、飼育されたものの肉をまずいと軽蔑してきた。では、羊とヤクという家畜種をめぐる彼らの価値観に一体どのような変化があったのか。

羊が減った原因について、それは牧畜民が羊の放牧作業を怠けるようになったためだという説明がある。羊の個体が小さく、収入を得るためにはかなりの数の羊を飼う必要があり、労力が必要である。羊の代わりにいちいち面倒をみなくても生きていける、個体が大きく金にもなるヤクを飼いたがるのだ、というのが「怠慢説」の骨子だ。牧畜民にとって、羊を含む家畜の飼い方は昔と今ではさほど変わっていないのに、今になって牧畜民が急にある特定の家畜種を嫌がり、その数を減らしているのだ、という部分の説得力は弱い。怠慢説と並行して存在するのは「狼害説」である。二〇〇〇年代に入り西部大開発という国家プロジェクトの下で、生物多様性の保全とりわけ野生動物保護政策が一段と強化された。結果、狼の数が急増し、家

畜、特に羊のような小型家畜を襲撃するケースが頻発した。昔は牧畜民が銃を所持することが黙認されていたが、二〇〇〇年代以降それが厳禁され、人々は狼に太刀打ちできなくなった。そこで牧畜民が考えたのが羊に比べて狼に強い種であるヤクの繁殖であるというのが「狼害説」だ。保護政策のため狼が増え、狼が増えたため羊が減りヤクが増えた、というこの狼害説は、怠慢説に比べて納得できる部分が多い。

ここで我々は、いわば「人間（政策）―狼―羊―ヤク」という種間関係の連鎖をみることができるが、この連鎖において役者として新たに登場したのが野生ヤクである。牧畜民が家畜ヤクの群れに野生ヤクを入れることで、両者の混血が進み、一種の家畜の「野生化」とでもいうべき事態が発生した。野生と家畜の境界をかく乱させているようにもみえる牧畜民の行動をいかに理解すべきか。これまで、家畜ひいては動物一般にまつわる文化人類学的な象徴研究においても、あるいは動物の利用に関する生態人類学的な実証研究においても、家畜と野生動物の関係は二項対立的に理解され、両者の境界は安定的なものとして措定されてきた。家畜と野生動物の関係をめぐるこうした理解の背景には、文化と自然の対立という二分法の存在が確認できよう。さらに、既存の研究では、自然の代名詞である野生動物が人間に飼いならされ、文化の領域に属する家畜になること、つまり動物の「家畜化」が論じられてきたが、「野生化」に関する議論がほとんどなかった。本論は、「人間―狼―羊―ヤク」という種間関係の連鎖の一環として登場した野生ヤクの活躍、家畜の「野生化」に関する牧畜民の論理を、チベット高原の文脈において記述分析することで、種間関係のダイナミックスを考察していく民族誌である。

二　ジョンの登場

別野生

家畜対野生動物、文化対自然といった二項対立的な図式においてではなく、複数種の絡まりあいにおいてブタとイノシシの関係をマルチスピーシーズ民族誌的に描いたラディカ・ゴビンドラジャンの研究は、家畜の野生化を考えるうえで重要である。インド北部ヒマラヤ地域において、家畜であるブタは人間が住む村と野獣の住む森を行き来したり、場合によっては数日が経っても森から村に戻って来なかったり、さらには森においては雌ブタの産んだ仔ブタの数が急激に増えたりする。結果、どれが野生のイノシシであり、どれが野生化したブタであるかは必ずしも自明ではない。一言でいえば、人間にとって、ブタが森で何をしているかは基本的に分からないものである。人間と絡まり

あいながら、人間による自然への支配の論理が必ずしも安定的に作動せず、野生とそうではないものとの境界が時おり流動的になるような種間作用の場を、ゴビンダラジャンは、「別野生（Otherwild）」と名付けた［Govindrajan 2018］。

ヒマラヤ山脈の北側に連なるチベット高原においても、野生ヤクによる家畜ヤクの「拉致」や家畜ヤクと野生ヤクとの交配に関するメディアの報道や人々の言い伝えは多くある。中国青海省玉樹チベット族自治州に位置するフフシル国立自然保護区は揚子江の源流地域にあたり、平均標高は四千六百メートルで、総面積は四万五千平方キロである。野生ヤク、チベットカモシカ、チベットノロバ、チベットガゼルなど二百三十種類を超す野生動物が生息しており、「野生動物の楽園」と呼ばれ、世界自然遺産に登録された。二〇〇四年十一月の『人民日報』の報道によると、発情期に入った野生ヤクは保護区から周囲の放牧地帯に乱入し、家畜ヤクの群れを包囲し、「妻」として雌ヤク三百二十頭を山の中に「拉致」してしまった。それらの雌ヤクがみつかったのは、「拉致」された三カ月後の十月末だったという［陳 二〇〇四］。三か月間、雌ヤクが山の中で何をしていたのかは、牧畜民には分からない。このことは、村から森に逃げたブタが森で何をしていたかがヒマラヤ地域の人に分からないのと同じである。野生ヤクの生活拠点となる「山」もヒマラヤの「森」と同じく、一種の「別野生」である。しかしながら、チベット高原の文脈においてはこの「別野生」は必ずしも「山」や「森」のような人間の目の届かない、不可視な存在とは限らない。

領地の一部がフフシル国立自然保護区に含まれる玉樹チベット自治州チュマルレプ（曲麻莱）県は、野生ヤクの生息地として知られている。地域の牧畜民は、毎年交配の期間になると雌の家畜ヤクを、野生ヤクが頻繁に出没するレソンロンワという場所に連れていき、野生ヤクとの交配過程を見守りながら、テントを張って二、三か月も滞在する［白 2014］。レソンロンワで妊娠した雌ヤクがやがて村で生んだ仔は、家畜ヤクに比べて、成長が速く、免疫力が強く人気を博す。野生ヤクによる家畜ヤクの「拉致」が、野生ヤクによる自然と文化の境界を侵犯する行為だとすれば、牧畜民が自らのヤクをレソンロンワという場所につれていき野生ヤクとの交配を待ち望むことは、人間による越境だ。いずれにおいても、野生と家畜、自然と文化の境界が流動的になり、「山」も「レソンロンワ」も「別野生」になる。だが「山」と異なりレソンロンワという場所は、牧畜民によって意味づけられた空間であり［トゥアン 一九九三］、不可視な存在ではない。では、牧畜民はその日常において、どのように野生ヤクを位置付けているのか。

ジョンの民俗

これまで筆者は日本語（英語）の慣習にしたがって家畜ヤク（domestic yak）と野生ヤク（wild yak）といった表現を用いた。家畜ヤクについてはスウェーデンの学者リンネが一七六六年に「Bos grunniens」と、野生ヤクについては帝政ロシアの将軍プルジェバリスキーが一八八三年に「Bos mutus」と、それぞれ学名を命名した。現在家畜ヤクはチベット高原や中央アジアなどに千四百万頭、野生ヤクはチベット高原に約一・五万頭が生息している［Leslie et al. 2009］。ここで総称となっている「ヤク」という言葉は、チベット語からの借用語である。チベット語でヤク（gyag）は去勢された雄ヤクを指す。去勢されない雄ヤクつまり種雄のことはウォハ（bag ha）、雌ヤクはジ（bri）と呼ばれる。ヤクとジの総称としてあげられるのは、ゾグ（zog）あるいはノル（nor）である。だが、ゾグにしてもノルにしても、黄牛や黄牛とヤクとの雑種などを含むウシ類の総称にもなりうるので、日本語や英語の「ヤク」とは完全に一致しない。そして、野生ヤクを表現する際、チベット語ではジョン（'brong）という言葉が用いられる。ジョンは本来野生ヤクの雄を指すが、野生ヤクの総称でもある。野生ヤクの雌はジョンモ（'brong mo）である。野生ヤクと家畜ヤクの雑種はジョンツァ（'brong tsha）と総称されるが、雌はジョンツァマともいう。

ジョンと家畜ヤクと黄牛などのウシ類家畜をめぐる牧畜民の評価において、ジョンは絶対的な優位性を示す。一方、ジョンと家畜ヤクとの間では、以下のような交配パターンで雑種が生まれる。（A）ジョンとジ、（B）ジョンモとウォハ、（C）ジョンとジョンツァマ。父系が野生ヤクのAの仔の体質が、父系が家畜ヤクのBより優れると判断される。中でも血統的に最もジョンに近いCの仔が最も望ましいとされる。論理的にCのパターンを繰り返していけば、限りなくジョンに近づくからである。交配パターンを問わず、生まれた雑種はすべて、ジョンの末裔という意味でジョンツァと呼ばれる。他方、チベット語で家畜ヤクと外来種の黄牛（ba lu あるいは ba glang）との雑種をゾ（mdzo）という。ゾはこの雑種の総称と同時にその雄を指すが、雌の場合はゾモ（mdzo mo）と呼ばれる。ゾモには生殖能力があるが、ゾにはない。種雄の家畜ヤクとゾモの交配種の雄はドゥレ（rtol lu）で、雌はドゥモ（rtol mo）である。ドゥレの価値が最も低い。屠られるか、ただで誰かにあげられてしまう。嫌われるドゥレは外見上醜いだけではなく、食べる量が多くかつ何でも食べてしまうという。大食いの人間をからかう時に「お前、ドゥレかい」という。ドゥレに対するあからさまな嫌悪で、ジョンツァを崇める態度とは真逆である。

野生の代表であるジョンと人間に馴化（じゅんか）された家畜の代表

である黄牛という二極の中間点に、家畜ヤクを配置した場合、ジョンツァがより野生に接近するのに対して、ドゥレはより家畜に傾斜することが分かる。ジョンツァへの偏愛とドゥレへの嫌悪からは、彼らの野生への憧れが読み取れる。チュマルレプ県の牧畜民の間では、「ジョンが来たら、ヤンを引き寄せるのだ」という言い方がある。チベット語においては、ヤンは絶対的な幸運を意味するものであり、人々はヤンを得たいと願って様々な努力をしていく［シンジルト　二〇一二］。この言い方は、野生ヤクが家畜ヤクの群れに入るだけで、その群れが元気になる、というようなラッキーな状態を表す。チベット牧畜地域の民俗知識において、ジョンと黄牛との対比はあるものの、ジョンとヤクとの対立はない。ジョンとヤクとの境界はあり互いに異なるが統一されている。ヤクは家畜であるが、ジョンによって幸運をもたらされる存在である。ヤクの望ましい状態を維持するため、ジョンは欠かせない、崇められる存在になる。牧畜民は意図的にジョンによるヤクの領域への越境を促し、別野生を醸成する。

三　村の別野生

英雄視される野生

チュマルレプ県から東へ約千キロに位置する河南蒙旗でも、昔から牧畜民の間では、自分たちのヤクが山に入り、なかなか戻らず数か月が経って妊娠して戻ったら、その仔はきっとジョンの仔だろうと推測される傾向がある。そのように推測したがるのは、ジョンのことが好きである故、ぜひ自分のヤクにジョンの仔を身籠ってほしい、と牧畜民が切望するからだ。切望するだけではなく、近年、河南蒙旗において、実際、ジョンあるいはジョンツァを飼う牧畜民の存在が目立つようになった。二〇一九年八月現在、河南蒙旗全体においてジョンは約三十数頭がおり、ジョンとジョンツァを合わせると、約七百頭あまりいるとされる。河南蒙旗の野生ヤクは主に先述のチュマルレプ県から導入された。河南蒙旗で最も多くのジョンを飼っているA氏によると、彼が二〇〇一年に一人でチュマルレプ県に行き、現地の牧畜民から一歳のジョンを一頭買って帰ってきたのが、彼の野生ヤク飼いの始まりだったという。それから、その一頭のジョンと家畜ヤクとの間に生まれたジョンツァが増えた。だが、時間が経つにつれて、近親交配の恐れが生じ、A氏は再びチュマルレプ県に行き、異なる血統のジョンを数頭導入した。それによって、近親交配は回避で

写真1　A氏宅のジョン（2019年1月トゥメド＝バートル撮影）

きたという。A氏はかつてヤクを三百頭飼っていたが、今はヤクに代わって、ジョンやジョンツァを二百頭飼っている。牧草地の面積は変わっていないが、収入は増えたそうだ（写真1）。

A氏によると、牧畜民はジョンが好きであるものの、購入単価が家畜ヤクの数倍も高いため、なかなか手が届かなかったが、近年様子が徐々に変わってきたという。一頭当たりの値段は高いが、家畜ヤクに比べて、同じ量の草を食べても、野生ヤクは成長が速く、成熟すると体重は家畜ヤクの倍にも達する。環境にやさしく、収入にもつながり、ひいては殺生の回数も減る。こうしたことが判明するにつれ、ジョンを飼う牧畜民が増えたという。二〇一九年、村長でもあるA氏は九万元でジョンを一頭購入し、村をあげてジョンツァ繁殖実験場を作り、無償でジョンの種を村人に提供している。村の総世帯数は四十二世帯だが、世帯あたり雌家畜ヤクを一頭出して、村全体でジョンツァの繁殖に励んでいる。河南蒙旗においては、自然保護のため狼が増え、狼が増えたため羊が減り、狼に対抗できるヤクが増えたが、ヤク増加のため草原が退化し、草原退化のためヤク個体が弱小化したという問題を解決するため、野生ヤクが登場したのだ、という説明がある。これは、冒頭で述べた種間関係の連鎖の更なる発展形とみてもよい。野生ヤクは家畜ヤクに力を与えるという理解である。牧畜民は野生

写真２　搾乳前にジョンツァマを優しく撫でる牧女（2019年１月筆者撮影）

ヤクに憧れ、それを英雄視し村に導入している。

ジョンやジョンツァを約三十頭飼っているB氏によると、「ジョンであっても、小さいころから撫でたりすることで、人間に慣れるのだ。今や、ジョンモの乳を搾る世帯もある」という。それを聞き、筆者は驚いた。搾乳というのは野生動物の家畜化の指標の一つだからである。そこで、筆者は「そうなってしまうとヤクとほとんど変わらず、ジョンといわなくてもよいのではないか」と問うた。B氏は答えた。「それは違う。公園で飼われているライオンやトラなどの野獣は外にいた時よりはおとなしい。しかし、だからといって、野生動物ではなくなったわけではない。村にいるジョンはそれに近い。ジョンはジョンで、ヤクにはならない」。B氏の言及は、人間による野生動物の征服を自慢したいからではなく、自分たちが憧れていたジョンといっしょにいることができたということを自負したいが故になされたものであろう。筆者にとって野生ヤクの家畜化のようにみえる現象であっても、彼らにとってそれはありえないものである。それはおそらく、筆者は両者を対立的に捉えているのに対して、彼らは両者を互いに異なりながらも統合したものとして捉えているからかもしれない。それゆえ、ジョンに限らず野生動物に憧れ、その力を借りたいと思い、行動に出る牧畜民は他にもいる（写真2）。

写真3　牧畜民が我がジョンを自慢するため道路沿いに立てた看板（2019年1月筆者撮影）

アルガリに熱中したというC氏の経験がその好例である。チベット語では「ニャン（gnyan）」という名で知られているアルガリの学名はOvis ammonであり、ヒツジ属のなかで最大種となる野生羊である。家畜羊と交配可能で、子孫も残せることをC氏は知っていた。そして、彼はインターネットを通じて、新疆にはアルガリが多く生息していることも把握した。アルガリを入手すべく、河南蒙旗から最短距離でも二千六百キロメートル離れる中国最西北端の新疆ウイグル自治区イリ＝カザフ自治州タルバガタイ地区に、二〇一一年にC氏と友人は交替で車を運転して行ったという。二匹を買ったのだが、二匹とも腕白でよく暴れ、ガソリンスタンドで従業員に怪しがられていた。幸いに新疆で購入したときに、地元の村長に証明書をもらったため、何とか無事に帰ってくることができたという。

そこまで苦労して新疆遠征した理由については、「とにかくアルカリが好きだった。できれば、青海省でもその末裔を繁殖させたかった」と説明する。青海省に戻った途端に、C氏たちが凄いものを連れてきたと噂された。あまりにも人気があったため、二十三万元で譲ってほしいという者も現れた。少し躊躇したが、売らなかったそうだ。その後、そのニャンと河南蒙旗の羊との間に仔（ニャンツァ）が十数匹生まれた。特に雄ニャンツァの中には赤い毛色のものもいた。その色は地元の牧畜民にとって珍しく、みなに

可愛がられていた。しかし、あまりにも腕白だったので、ニャンツァは売られた。高いものは三・五万元で、他は一・二万元、一万元、八千元などで売られた。成畜ヤクの平均相場が数千元であることを考えれば、いずれも高価だったことが分かる。C氏は、河南蒙旗の南に位置するマチェ県の友人に頼まれて、老衰したニャンを友人の馬と交換した。手放しはしたものの、C氏にとってそのニャンは英雄的な存在であり続けた。こうしたニャンの位置づけを考えると牧畜民のジョンへの憧れは孤立した現象ではないことが分かる（写真3）。

危険視される野生

ジョンやニャンを英雄視するのは、ふつうの牧畜民だけではなく、近代教育を受けた幹部も同じである。だが、家畜をめぐる地域特定の文脈においては、ジョンやニャンが危険視されることもある。冒頭で述べたように、河南蒙旗は自然豊かな牧畜地域であり、中国の三大馬種の一つ「河曲馬（Hequ horse）」、チベット系綿羊の一種「ングラ羊（欧拉羊 Oula sheep）」の主な産地となる。河南蒙旗は二〇一二年からヤクの新しい品種開発に取り組み、成功したとされる。「ホド・ヤク（雪多脅牛 hodo yak）」と名付けられた新品種は、二〇一七年十二月、「家畜および家禽の遺伝資源に関する国家保護リスト（中国国家級畜禽遺伝資源保護名録）」に登録された。二〇一八年七月にングラ羊も同リストに登録された。両品種の普及を推し進めていくべく、地方行政府はさまざまな国家プロジェクトに関わり、補助金を獲得した。牧畜民世帯が、その補助金を申請したい場合、家畜の個体情報を登録することが義務化されており、両品種を飼う牧畜民しか優遇政策を受けられない。両品種は、河南蒙旗の家畜ブランドになった。

家畜は個人所有であるため、ジョンやニャンを飼うこと自体は禁止されないが、いくつかの公的な場面においてジョンやニャンそしてその末裔は疎外される。河南蒙旗では、毎年夏、畜産管理機関の主催の下で、ヤクや羊の体重、体形や発育状況、毛並みなどの見栄えを競う「家畜コンテスト」が開かれる。賞金獲得のためだけではなく、牧畜民にとって威信をかけて家畜自慢をすることができる数少ないチャンスである。だが、コンテストではジョンやニャンは門前払いにされる。その理由については、それは組織側がジョンやニャンをヤクと羊と全く別種の動物と考えているからではないか、と推測する牧畜民もいれば、ジョンやニャンがコンテストの参加が許されると、ほかのヤクや羊に勝ち目がないからではないか、と分析する牧畜民もいる。牧畜民は自分たちのジョンやニャンが排除されていても、依然強気でジョンやニャンの優位性を強調する。

他方、幹部は国認定の家畜ブランドの純粋さを保とうと躍起になっている。特に畜産管理機関の幹部にとって、野生の代表であるジョンの存在を排除することは仕事の一環になる。畜産管理機関の責任者D氏はいう。「ジョンはホド・ヤク普及の邪魔になるので、その数をなるべく減らし、ジとの交配を避けるべきだ」。公的な立場に立って発言するD氏の論理は明快で、主張は一貫している。とはいえD氏は常にジョンを悪としているわけではない。ひとりの個人として彼はジョンに対してむしろプラスの感情をもっている。実は、D氏の弟家族のジがジョンの仔を生んだとの情報を別ルートで得た。その仔の成長について筆者が訪ねてみたところ、D氏は「それはヤクと違って逞しい」と誇らしげに答える。河南蒙旗のようなチベット高原牧畜地域で、人間活動の拠点であるはずの「村」は一種の「別野生」を内包していることが確認できる。それは牧畜民の野生動物に対して抱く敬意や憧れなどのプラス感情によって可能になっている。このことは、ジョンなど野生動物を危険視する幹部が実はその内心において崇めているということからも窺える。

四　野生の恩恵

ブランドを支える野生

D氏の弟のE氏の家は、ホド・ヤク養殖基地の近くにある。とある日、筆者の長年の友人でもあるE氏は笑顔をみせながら小さい声で筆者にいった。「実は、基地のジョンがうちのジに種付してくれたのだ……」。ジョンが雌家畜ヤクと自然交配したわけだ。河南蒙旗でジョンに種付してもらうために、種付金を払う必要があり、ただで種付してもらったE氏がラッキーな気分になるのは理解できる。他の牧畜民に比べて、E氏は確かにラッキーな人であるが、他の牧畜民も基地にジョンがいることはよく知っている。さらに、「ホド・ヤクとかいっているけど、あれはジョンツァだ」とまで断言する人もいる。

地方行政府の後押しもあり、河南蒙旗の東部に位置するセルロン郷ラムロン牧畜民委員会（村）において、二〇一二年に基地が創設された。この基地で開発されたホド・ヤクが、今や河南蒙旗のブランドになっている。ホド・ヤクの「ホド」は、ラムロン村でも良質な牧草と豊かな河川に恵まれた平らな草原の名である。論理的にホド・ヤクは、ホドという土地で育ったヤクであり、ジョンなど野生動物の要素が入る余地はない。人々はなぜホド・ヤクをジョンツァだと理解しているのか。気になった筆者は基

写真４　草原を練り歩く養殖基地の２頭のジョンツァ（2019年１月筆者撮影）

地を訪れた。ホド・ヤクは、他の地域のヤクに比べ、背中は隆起し身長が高く角は長く軀体の毛色は黒一色で、唇あたりは薄灰色にみられるものが多い。これらはそのままジョンの特徴でもある。

筆者が広い基地のなかを歩いていたところ、三十メートルくらい先に、巨大なヤクが黙々と草を食べていたのがみえた。しばらくすると相手もこちらに顔を向けて筆者を睨み始めた。襲われる可能性があるので、絶対にこれ以上に近づかないでください、と案内してくれた基地の従業員に警告された。従業員がいるからもう少し近づいてその迫力のある顔を写真に収めようと試みたところ、従業員に「この先のことを俺は知らない」と叱られてしまった。叱られて筆者は初めて、相手はヤクではなく、ジョンであることに気づいた。そのうち、基地のヤクの群れの中にそのジョンの仔が二頭いることも分かった。他にジョンツァがいるかについては確認しなかったが、ジョンも含めてすべてが放し飼いされていたので、他にいた可能性は高い。また、基地の近くに住む一般牧畜民のヤクの群れにも、ジョンが進入しているから、E氏のようなラッキーな人が現れただろう（写真４）。

このような状況に身をおく筆者は敢えて基地の従業員に「基地にジョンツァは全部で何頭いるのか」などのような質問をしなかった。案内してくれた従業員も基地にいる

ジョンやジョンツァのことについて取り立てて何か説明しようとしなかった。基地にジョンがいて当然、というのがその場の雰囲気であり、回答であった。また、「あれはジョンツァだ」という牧畜民の評価もあながち間違いではないことが分かった。それと同時に、牧畜民は、もし自分たちの話の相手がジョンに関心をもつ筆者ではなかったとしたら、きっと「あれはジョンツァだ」ということを強調しなかっただろう。家畜ブランドを創るという文脈においてジョンは表舞台からみえないようになったが、ジョンがいなければホド・ヤクは存在しない。ジョンにまつわる事柄が、淡々と生起している。ジョンは、E氏のような個人やホド・ヤク養殖基地のような組織に幸運や恩恵をもたらしている。

最後の希望となる野生

河南蒙旗で筆者はあるインフォーマントにジョンのことを知りたかったらダトンに行くのが良い、といわれたことがある。ダトンとは河南蒙旗から北へ四百キロくらい離れる青海省大通県のことである。ダトンには世界で唯一野生ヤクの冷凍精子を生産できる機構「青海省ダトン種雄牛センター（青海省大通種牛場）」がある。筆者が同センターを訪れたのはたまたま木曜日だったが、図らずも精子採集の日に遭遇し採集過程を観察することができた。一頭の雌家畜ヤクは、軀体の左右が鉄パイプで造られた柵に囲まれ、四肢が固定されたまま立たされている。後ろから従業員に連れられてきたジョン（ジョンツァ）が、数分も経たないうち発情しマウンティングするため前の両足を柵にかけて射精する状態に入る。それを隣でみていた従業員が細長い形状の人工陰道を持ち出し、そのなかに陰茎を挿入し射精させる。異なる個体の精子が混同しないようにするため、人工陰道は個体ごとに専用となる。活力など精子の品質が確認され合格したら即冷凍されるが、さもなければ廃棄される。

一見、地味そうにみえる作業だが、実は、野生ヤクの精子採集に成功したのは、同センターが世界初だった。センターは、海抜二千九百メートルから四千二百八十メートルまでの高原地帯に位置し、東西は四十キロメートル、南北は十五キロメートルと、広い面積をもつ。二〇一九年九月現在、センターには、約二万頭の野生ヤクと家畜ヤクおよびその雑種が生息し、すべての個体には番号が振られており、その血統は一目瞭然である。技術者以外、放牧する従業員は九十世帯くらいおり、ほぼ地元の牧畜民である。一九五二年に創立されたセンターは、ヤクの品種改良とその普及を専門的に行う公益目的の国立機関である。敷地内に「中国農業科学院蘭州畜牧与獣薬研究所」という研究機関が設けられ、センターとは協力関係にある。センター

写真５　センター従業員がジョンの精子を採集している最中（2019年９月筆者撮影）

は「復壮」というスローガンを掲げている。復壮という漢語に対応する日本語は、元気の回復、あるべき姿を取り戻すという意味でのリジュベネーションであろう。センターの文脈でいうリジュベネーションは、既に退化したあるいは退化し始めているヤクという家畜種を本来あるべき健康で逞しい状態に戻すことを指す。しかし、何をすればヤクのリジュベネーションになるか、その方法が確立されるまでは失敗の連続だったという。センターが最初に試みたのは黄牛との交雑、いわば種間繁殖だったが、その雄仔牛に繁殖能力がないため挫折した。それから試みたのは、異なる地域の異なるヤク品種の交雑、いわゆる種内繁殖だったが、効果はなかった。試行錯誤の末、最後に辿りついたのが、雄野生ヤクと雌家畜ヤクとの交配、あるいは野生ヤクの冷凍精子で雌家畜ヤクに人工授精させる、という方法であった［閻ほか　二〇〇六］（写真５）。

一九八二年、センターは前述の玉樹チベット自治州チュマルレプ県から雄のジョンツァを一頭導入し、翌年甘粛省からさらにジョンを二頭導入した。一九八四年、初めて野生ヤクの精子採集および精子冷凍に成功した。一九八六年、センターは上記研究所と協力し、良質の種雄やその冷凍精子を提供する「青海省野生ヤク種雄ステーション」という育種機関を作った。後にさらにジョンを六頭導入し、これらの雄がセンターにおける育種の父系を成した。世代

を重ねることでセンター独自の品種開発に成功した。ゼロ世代は野生ヤク（ないしその冷凍精子）と地元の雌家畜ヤク、第一世代はゼロ世代で生まれた雄ジョンツァと雌ジョンツァ、第二世代は第一世代で生まれた雄ジョンツァと雌ジョンツァだった。野生ヤクと家畜ヤクの血統を半分ずつもつジョンツァ同士の交配が繰り返された結果、安定した特徴をもつ第四世代が二〇〇四年に生まれた。「ダトン・ヤク」と名付けられた第四世代が世界初の人工繁殖のヤク品種になった。ジョンの遺伝子が半分を占めるため、ダトン・ヤクの外形はジョンに近似する。一九九九年から二〇〇五年までセンターは、青海省・甘粛省・新疆ウイグル自治区・チベット自治区・四川省などへダトン・ヤクの種雄九千六百五十四頭、冷凍精子二十七万本を提供し、その間毎年平均三十万頭のヤクが品種改良された［陸ほか　二〇〇六］。

ダトン・ヤクの使命は家畜ヤクのリジュベネーションだ。二〇〇四年青海省で「ヤク百万頭リジュベネーション事業」が起動されて以来、二〇一三年までにセンターは省内各地にダトン・ヤクの種雄を一万四千六百四十頭提供し、二〇一三年現在青海省内でダトン・ヤクの末裔は九十一万頭まで繁栄した［拉ほか　二〇一四：五五］。専門家によっては野生ヤクこそ家畜ヤクのリジュベネーションの「最後の希望」と断言する者もいる［楊　二〇一六］。家畜ヤクのリジュベネーション現場で決定的な役割を果たす野生ヤクの位置づけから、前節の「山」や「村」にも増して、地域ブランドの「基地」や国立研究機関の「センター」が別野生であることが分かる。本節で検証したヤクという家畜種にもたらすリジュベネーションと、前節でみたヤクの群れにもたらすヤンと高い親和性をもつ。牧畜民の民俗知識の有効性が科学的に実証された。

五　家畜の野生化

本論冒頭で述べたようにある特定の要素の変化によって、チベット高原における種間関係が大きく変動した。河南蒙旗において、食生活が変わっただけではなく、野生ヤクが村の日常に登場し、家畜の野生化が現れた。野生動物と家畜の境界が流動的になる別野生も、目の届かない森や山ではなく、村に現れた。村における野生ヤクの登場は、見方によっては野生動物の家畜化になろうが、牧畜民の民俗知識において野生ヤクの家畜化は生じ得ない。野生ヤクは家畜ヤクに幸運をもたらす英雄的な存在であり、憧れの的だからである。その意味で、村における別野生は牧畜民が醸成したものであり、牧畜民が自らこうした別野生に溶け込み、それを満喫している。彼らは種間関係の外におかれた特別な存在ではなく、黄牛を嫌う一方でジョンを崇め

るような、種間関係の一要素になる。

基地で育つホド・ヤクは地域のブランドになっており、畜産管理当局からはホド・ヤクと野生ヤクとの交雑が危惧され、野生ヤクがしばしば排除の対象になるが、ホド・ヤク自体が野生ヤクとの混血であることは公然の秘密だ。基地が別野生化したからこそ、優秀なヤクを輩出することができた。基地は暗黙裡に牧畜民の民俗知識を実践している。ヤクという家畜種の品種改良に特化した種雄牛センターも野生ヤクとは無縁ではおられず、むしろ基地よりも高い次元で別野生と化している。科学者が試行錯誤の末、遺伝子の領域において、野生ヤクが家畜ヤクにリジュベネーションをもたらすことを解明したからである。センターの科学者によって野生と家畜の境界は溶解され、流動的になる。

ヤンを希求する牧畜民にとっても、リジュベネーションを追求する科学者にとっても、家畜は常に家畜であり続け、つまり再生され続ける存在であるべきだ。この再生は家畜自体だけではなく、非家畜との絡まりあいによって可能になる。この点は、家畜ヤクの再生における野生ヤクの関与、家畜の野生化について論じた本論で検証された。野生ヤクと家畜ヤクの間には境界はあるが、その境界は流動的である。流動的な境界、すなわち、別野生において家畜が再生されている。この再生は、家畜と野生動物の境界を認めつつ、その境界の横断に最大の価値をおき、最終的な希望を見出す行為である。野生化によって家畜の再生が可能だとすれば、人間の究極な拠り所は完全に人間の支配下にあるものではない。家畜であることは必ずしも野生動物など非家畜との対立においてのみ成立するわけではない。対立ではなく、絡まりあいにおいて家畜であり続けるのである。これがチベット高原における種間関係のダイナミックスともいえよう。

引用文献

白福蘭　二〇一四「野犛牛培育――曲麻莱牧民的『金子草』」『三江源報』http://www.yushunews.com/system/2014/10/31/011543593.shtm（二〇一四年十月三十一日　一三：四一：三三）

陳沸宇　二〇〇四「可可西里野犛牛数量大増　熱衷強携家犛牛為妻」『中国新聞網』http://news.sina.com.cn/c/2004-11-23/1434432368ds.shtml（二〇〇四年十一月二十三日　一四：三四）

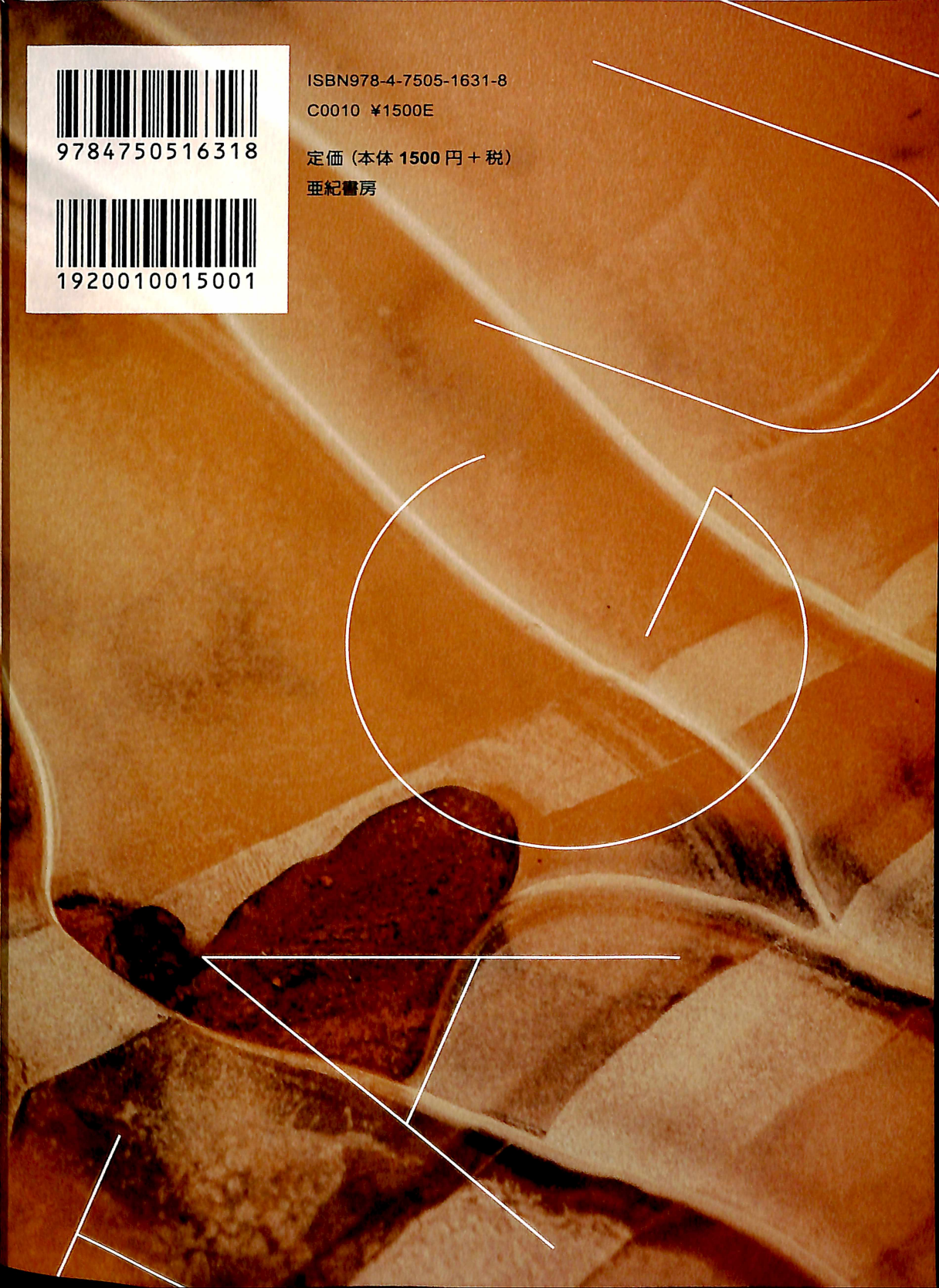
Govindrajan Radhika 2018 *Animal Intimacies: Interspecies Relatedness in India's Central Himalaya*. University of Chicago Press.

拉環、馮宇誠、馬進寿　二〇一四「大通犛牛推広十年的回顧与展望」『中国牛業科学』四〇（二）：五四－五六。

Leslie, D. M., Jr. and George B. Schaller 2009 "Bos grunniens and Bos mutus (Artiodactyla: Bovidae)". *Mammalian Species*. 836:1–1.

陸仲磷、何暁林、閻萍　二〇〇五「世界上第一个犛牛培育新品种――『大通犛牛』簡介」『品種資源』二五（五）：五九－六一。

幸崎　二〇一五「野血犛牛、緑色発展新希望」『三江源報』http://www.yushunews.com/system/2015/10/18/011843589.shtml（二〇一五年十月十八日　一三：〇三：二六）
シンジルト　二〇一二「家畜の個体性再考――河南蒙旗におけるツェタル実践――」『文化人類学』七六（四）：四三九－四六二。
シンジルト　二〇一六「優しさと美味しさ――オイラト社会における屠畜の民族誌」シンジルト、奥野克巳編『動物殺しの民族誌』昭和堂：二二七－二六〇。
トゥアン、イーフー　一九九二『空間の経験――身体から都市へ』山本浩訳、筑摩書房。
楊海金　二〇一六「野犛牛的馴養与管理」『中国畜牧獣医文摘』三二（九）：七七。
閻萍、陸仲、何暁林、楊博輝　二〇〇六「『大通犛牛』新品種及培育技術」『中国牛業科学』三二：一四二－一四四。



9784750516318
1920010015001
ISBN978-4-7505-1631-8
C0010 ¥1500E
定価（本体 1500 円＋税）
亜紀書房

人間の「外から」人間を考える
ポストヒューマニティーズ誌

たぐい

vol.2

特集1
共異体の地平

特集2
仏教・異界・精神分析

vol.2

奥野克巳
近藤祉秋
赤嶺淳
石倉敏明
磯田和秀
大村敬一
工藤顕太
甲田烈
上妻世海
シンジルト
中上淳貴
MOSA
吉村萬壱

AKISHOBO

たぐい vol.2